

## フィールドネット・ラウンジ ワークショップ実施報告書

文責：長沼秀幸

※当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

### ・企画名

フィールドネット・ラウンジ「ロシア・中国におけるムスリム・マイノリティと国家：20世紀政治変動期における多文化共生の実践とその課題」

### ・企画責任者：

長沼秀幸（東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻アジア史専門分野・博士課程/日本学術振興会特別研究員DC2）

### ・アドバイザー：

森本一夫（東京大学東洋文化研究所・准教授）

### ・日時：

平成28年1月9日（土）午後1時より午後7時まで

### ・場所：

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所3階 マルチメディアセミナー室 306

### ・プログラム：

①磯貝 真澄（京都外国語大学）

タイトル：

ソ連初期ヴォルガ・ウラル地域におけるウラマー、ムスリム・コムニスト、東洋学者

要旨：

本報告では、1930年代までのソ連における、ヴォルガ・ウラル地域のウラマーとムスリム・コムニスト、そして東洋学者や政府指導部の相互関係を、アラビア文字文献の収集・保存問題を事例に検討した。本報告で重要な分析視角としたのは、考察対象とした地域・時代において、マジョリティとしての正教徒（ロシア人）対マイノリティとしてのムスリム（タタール人やバシキール人）という構図を措定することが困難であるという点である。報告者はこのような視点のもと、前述の関係が、宗教や民族という枠組みよりも、帝政期の身分、社会層、ないしは特定の思潮などで特徴づけられる世代といった枠組みによって定まるものだったことを明示した。

②櫻間 瑛（日本学術振興会特別研究員）

タイトル：

異民族同化の先兵か、啓蒙の聖人か？：現在の非ロシア人から見るN. イリミンスキーの宣教活動への評価と民族意識

要旨：

本報告では、19世紀末に沿ヴォルガ中流域の非ロシア人に対する宣教政策の中心を担ったニコライ・イリミンスキーに対する評価の変遷を取り上げた。イリミンスキーは、キリル文字を用いた、現地民の口語での聖典翻訳、および非ロシア人聖職者の育成を通じて、現地人に対するロシア正教の浸透を図った人物である。現在では、彼の活動に対しては肯定的評価（ロシア正教徒中心）、否定的評価（ムスリム・タタール中心）の双方が存在する。本報告では、ソ連時代から現代にかけての百科事典・教科書・メディアを主な資料とすることで、彼に関する評価の変遷、偏差を分析した。これら分析を通して、イリミンスキーの叙述のされ方が、時の政権による公定歴史学の影響を大きく受けていたことがわかった。報告者は、これらの資料におけるイリミンスキーの表象され方および彼に対する評価と、民族意識の問題とを関連付け、前者が非ロシア人それぞれの民族意識を創出するうえでの一つの参照項になっていたと指摘した。

③松前 もゆる（盛岡大学）

タイトル：

体制転換後のブルガリアにおけるマイノリティ政策とムスリムの生活戦略：イスラーム、ナショナリズム、トランスナショナリズム

要旨：

本報告では、人口の約1割をムスリムが占める現代のブルガリアを対象に、社会主義体制崩壊後のイスラームをめぐる政策と人々の生活戦略について考察した。この時期は、それまでとは異なる国家の宗教政策、マイノリティ政策がとられ、それに応じてブルガリアのムスリム・マイノリティ（本報告で対象としたのは、宗教的にはイスラームであるが、ブルガリア語を母語とするポマクという人々）たちもまた、改めて自らの立場を模索する必要に迫られていた時期である。報告者は、ブルガリアのロヴェチ県における二つの村落で行ったフィールドワークに基づき、ポマク女性が村内・村外それぞれの空間で服装を変えていること、村内でのミナレット建設に対するポマク自身の態度の多様性などを指摘した。本報告では、こうした観察結果に基づき、ブルガリア正教徒という多数派とポマクのような少数派の差異のみにとらわれるのではなく、少数派内部での多様性にも目を向ける必要性を強調した。

④野田 仁（早稲田大学）

タイトル：

ムスリムか遊牧民か？：清末のカザフ遊牧民統治

要旨：

本報告は、19世紀後半以降のムスリム反乱やイリ事件により大混乱に陥った新疆北部に焦点を当て、この地域に分布するカザフ遊牧民に対する清朝の認識を、統治政策という観点から考察した。報告者は、1884年の新疆省制開始前後から改めて整えられることとなったカザフ遊牧民に対する統治政策において、清朝がイスラームという彼らの信仰的側面よりも遊牧民という

生活形態に重きを置いていたと指摘した。遊牧という生活形態の重視は、彼らがもつ越境性とも深く関連していた。その結果、実態としては、カザフに対する厳格な土地管理は行われず、遊牧民統治においては彼らの家畜を資源として活用する政策がとられた。報告者は、この点にかんがみ、旗という明確な境界線を持った外モンゴルにおける統治との比較も重要な課題として提示した。

⑤中西 竜也（京都大学）

タイトル：

日中戦争期中国ムスリムとウンマ

要旨：

本報告では、日中戦争時期の中国ムスリム知識人たちが、「中華民族」への帰属・忠誠を表明する一方で、国際的なムスリム共同体としての「ウンマ」の理念をどのように取り扱ったかを検討した。特に着目したのは以下の二点であった。第一に、王静齋『古蘭経訳解』の三種の版本のあいだで見られる、ウンマの訳語の変遷から、中華ナショナリズムと汎イスラーム主義のあいだで揺れた、彼の苦心の様を描き出した。第二に、雑誌『月華』で展開された、抗日闘争を「防衛ジハード」とみなす議論の過程において、中国ムスリムとウンマの関係をめぐる言説がいかに変化したかを分析した。報告者は、これらの著作の精緻な分析を通して、蒋介石が「回族」呼称を禁止した1939年7月が重要な転機であることを指摘した。この時期を境に、『月華』では却って、中国ムスリムのウンマへの帰属が強調され、「中華民族」への排他的帰属の否定が示唆されるようになったのに対して、王静齋は、中国をイスラーム世界とみなす一方で、ウンマの一体性に言及することを回避するようになっていったと論じた。

⑥小野 亮介（慶応義塾大学大学院）

タイトル：

匪賊、闖入者、エージェント候補としての新疆カザフ難民：中国、インド、アメリカの視点から

要旨：

本報告では新疆から甘肅・青海・チベットを経てカシミールに逃れ、最終的にトルコへ移住したカザフ難民を取り上げた。彼らは、人民解放軍の新疆省進駐（1949年）を契機として故郷を脱し、1951年にカシミールへたどり着いた人々である。本報告では、このマイノリティ集団を巡って中国共産党、インド国会、そしてアメリカ外交筋が残した記録を資料として用いることで、中・印・米が彼らをどう評価・利用しようとしたか考察した。報告者は、このカザフ人難民が、中国にとっては新疆「解放」の正当性を脅かす匪賊であり、インドにとっては共生を望まない闖入者であり、そしてアメリカにとっては対中・ソ諜報活動のエージェント候補であった点を指摘した。加えて、本報告が扱ったカザフ人の動向は「初期冷戦の末端で放つ特異な存在感」と位置づけられるとしながらも、世界各地に散在している資料状況などにかんがみ、よ

り複合的・総合的研究の必要性を今後の課題として提示した。

⑦澤井 充生（首都大学東京）

タイトル：

「愛国愛教」を叫ぶムスリムたち：現代中国の宗教政策と清真寺の自律性

要旨：

本報告では、中央および地方で宗教管理が強化されるようになった1990年代以降を対象に、中華人民共和国における宗教政策の宣伝活動（「愛国愛教」などのスローガン）と、それに対する清真寺（モスク）側の反応を、報告者のフィールドワークに基づいた微視的な視点から考察した。本報告の事例を通して明らかになったのは、信徒が政治スローガンを「自主的」に掲示・宣伝し、愛国主義の発揚に積極的に「協力」している一方で、それが必ずしも党の政策を熱烈に歓迎していることを意味しないという点である。報告者はこれを、一般信徒の党・行政関係者の宗教政策に対する「面従背腹の態度」と解釈し、表面的には国家との対立を避け、自らの信仰や風俗を維持しようとする彼らのしたたかさの表れであるにとらえた。しかし、このような信徒側の自律的な姿勢を過度に強調することには慎重にならざるをえず、全体としてみると、党・行政機関・宗教団体・清真寺のあいだで繰り返される政治的な駆け引きの中で展開される「イスラーム復興」は、党国家主導の「宗教復興」であるとも指摘した。

・実施報告：

本企画では、フィールドネット・ラウンジの基本理念である「地域」および「ひと」をそれぞれ「イスラーム地域」、「ムスリム・マイノリティ」と関連付け、以下の趣旨に沿ってワークショップを開催した。

本企画が焦点を当てたのは、旧ソ連圏および現代の中華人民共和国におけるムスリムと国家の相互関係である。そして、そのような関係の性格が最も明瞭に顕在化するのが政権や王朝が交代する時代の過渡期であるという想定に基づき、副題にあるように、時代的には20世紀を主な考察の対象にすえた。

近年の研究では、国家とムスリムの相互関係に着目し、その関係を「支配と抵抗」といった一面的な側面からとらえるのではなく、両者の交渉過程を重視するアプローチが盛んである。そこでは、独自の信仰やエスニック・アイデンティティを守りたいムスリム側と、宗教・民族政策を推進する国家側とが、互いに協力・共存の道を模索してきた事実などが明らかになりつつある。しかし、これらの地域のムスリム・国家関係は、それぞれの国家単位で別々に考察されることが多く、相互に比較検討されることはまれであった。本企画の最大の狙いはこの点にあり、個別の地域で蓄積されてきた近年の研究成果を相互に対話させ、議論することにより、より包括的なムスリム・国家関係像を描き出すことを目指した。

以上のような趣旨に基づいて実施したワークショップであるが、最も大きな成果は次の点であった。それは、それぞれの報告者が想定したムスリム・マイノリティという集団と国家の関

係を考察するうえで、本企画の重要概念の一つである「ムスリム・マイノリティ」という分析視角の有有用性・妥当性に疑問が呈されたことである。こうした疑問は、コメンテーターの吉澤氏（東京大学）や鶴見氏（埼玉大学）に加えて、報告者自身からも投げかけられた。例えば、ソ連においては、ムスリムと国家との関係を、ムスリム・マイノリティという枠組みでとらえるよりも、帝政期の身分や社会層といった視角から分析することの必要性が唱えられ（磯貝報告）、また、カザフ人というムスリムを統治する上で、清朝は彼らの遊牧民という側面をより重視していた点などが指摘された（野田報告）。こうした問題提起からは、ムスリム・マイノリティという概念が、たとえ実態を伴っていたとしても、必ずしも当該集団を分析する際に有用な分析概念にはなり得ないということがわかる。そして、こうした問題は、ロシア・中国の両地域に共通のものであった。この点は、比較分析という手法を導入することで明らかになった、本企画の成果であるといえる。ただ惜しむらくは、以下に述べるもろもろの問題点により、上記の問題提起が単なる問題提起にとどまってしまい、より効果的な分析視角は何かといった議論にまで発展させることができなかった。

本企画には、準備段階から多くの課題が残った。まず、当日の参加者からは、各セッションの内容的まとまりが見えにくいという指摘を受けた。こうした印象は、特に本企画のテーマを専門としない研究者を中心に見られたもので、言うまでもなく個々の報告内容の問題ではなく、企画者側に責任がある。このような印象を与えてしまった要因は複数考えられるが、第一に、それぞれの報告者への依頼の仕方が漠然としすぎていた。基本的に、「自らの研究内容に引きつける形でムスリム・マイノリティと国家関係を議論する」ように依頼しただけであり、企画者側から報告内容をもう少し具体的に複数提示しておく方が望ましかったかもしれない。第二に、当日の趣旨説明および各セッションの冒頭におけるそれぞれの報告者の役割や位置づけなどを企画者側が明示する必要がある。本企画のテーマに詳しくない者にとって、こうした作業は特に必要であったと思われる。これらはすべて、企画者側による時間的制約を考慮したうえでの意図的な省略・簡略であったが、ワークショップ参加者の多さ（約80名）をみるとやはり必要であった。

全体討論の時間が少なかったのも大きな反省点であった。報告とコメントが終わった段階で、当初の終了予定時間の10分前であり、企画責任者の判断で時間を延長したが、それでもやはり30分程度しか全体討論の時間を確保できなかった。これは、各セッションの司会によるタイムキーピングの問題、およびプログラム自体が時間的に窮屈であったことが原因であると考えられる。この問題点は比較的容易に解決しうるものである。次回以降は克服したい。また、ワークショップ当日の内容とは直接の関係性は薄いだが、準備段階で成果出版の話をもっと本格的に議論すべきであった。報告者およびコメンテーターの顔ぶれ、当日の参加人数から見る本ワークショップのテーマに対する関心の高さにかんがみると、今回の成果は活字にするべきであったかもしれない。

最後に今後の活動計画について簡単に述べたい。今後は、第一に、他地域との比較をさらに進めていきたい。今回は、主にロシアと中国に居住するムスリムに焦点を当てたが、例えば東

南アジアなどといった地域にもムスリムは存在する。「マイノリティ」という言葉でくくるかどうかということには慎重になる必要はあるが、いずれにしても比較の材料は少なくないので、他地域の研究者を巻き込んだ活動を展開したい。第二に、本ワークショップで問題提起されたマイノリティという分析概念の妥当性について、より多くの事例を集積・検討することによって、その議論を深めていきたい。今回は宗教的マイノリティに着目し、特にムスリムに焦点を当てた。周知のように、民族的マイノリティや他宗教のマイノリティなど、他にも多様なマイノリティが存在する。そのような「その他のマイノリティ」を扱った場合、本企画と同様の問題点が観察されるのか、観察されるならば、より効果的な分析概念は何か、などといった点について考えてみたい。